

## SY4-2

小学生へのいのちの教育  
—手作り教材を中心に—

川邊 恵美子

はな助産院

初めてのいのちの教育をしたのは、18年前でした。保健所より思春期セミナーの依頼を受けました。対象は小学2年生で、生活科「大きくなった私たち」(現在は「自分はっけん」)の単元です。家族へのインタビューなどを通して、生まれてから今までの成長や、できるようになったことを自分でまとめていく授業です。その単元の中で助産師として、生まれる前の話・生まれる時のこと・生まれてからのことを伝えました。

専門用語は避け、言葉だけでは伝わりにくいことを、視覚的な教材や、体験を中心として指導案を考えました。例えば、黒画用紙に針で穴を開け、いのちの始まりの大きさを感じてもらったり、各月の胎児の大きさ・重さを模した人形に触れてもらったり、クイズ形式でおなかの中の赤ちゃんの様子を伝えたりしています。体験については、大きな子宮の袋から、手を使わないで、生まれてくる体験。円になって、グループで、3キロの人形抱っこしたり、沐浴したりするお世話体験。時には、本物の赤ちゃんとの、触れ合い体験をしていました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大により今までのような体験はできなくなっています。人と人との距離をとり、物の使い回しを避け、感染防止をしながらセミナーを開催しています。

この、18年前の指導案を元に、幼児から小中高校・専門学校・特別支援学校・児童養護施設・生涯学習センターなどで、セミナーを続けています。幼児には歌を歌って、からだを知ってもらったり、小学4年生の保健の授業の中では二次性徴を取り入れたり、5年生には理科の人の誕生との関連を図りながら、パワーポイントで、写真を用いて生物学的な理解を深めたりと、年齢に応じた教材を試行錯誤しています。もちろん一人ではできません。保健師さん、学校の先生、お世話体験の時には校長先生のお手伝いもありました。地域の民生委員・児童委員、保護者の方たちの子どもへの愛情いっぱいの協力を得ながら、子どもたちの生き生きとした表情を頂いています。

いのちの教育を行うにあたり、大切にしていることは、子どもたちと呼吸をあわせるようにしています。先生の挨拶の後、そわそわしていたり、他のことが気になったりする子の目線をまず、こちらに向けてから話し始めるようにしています。一方的な話にならないように、発問したり、自分で考えられるように間を置くようにしたり、こころに響くように、ゆっくりと語りかけるようにしています。自分の経験、体験を自分のことばで、こころに語りかけるように心がけています。そうすると、最後には、空間の雰囲気があたたかく、しみりとひとつにまとまって、みんながひとつになれたように感じます。

今回のシンポジウムでは、いのちの教育で使っている教材の紹介、体験の様子、子どもたちからの質問や感想、助産師からのメッセージをお伝えしたいと思います。